

シリーズ2 学校が地域をかえる！

絶滅危惧種を自然再生する中学生軍団！
上郡中学校科学部の取り組み -三橋弘宗-

チスジノリという湧水にすむ藻類を知ってますか。もし知っていれば、かなりマニアックですね。チスジノリは、兵庫県のレッドデータブックでは、絶滅種に指定され、1992年から発見されないため、絶滅したと思われていました。産地は、広い県内を見渡しても、上郡町を流れる安室川(千種川の支流)だけ。珍しさのランクは、「コウノトリ級」。しかし、2004年に、突如としてチスジノリが発生し、大きく新聞に取り上げられました。実に9年ぶりです。そう、チスジノリは、この地でひそかに生き残っていたのです。このニュースを聞いて、保全活動に立ち上がったのが、上郡中学校科学部です(顧問:東山真也先生／ひとはく地域研究員)。部員数は現在18名。東山先生によれば、「チスジノリの発生地は学校のすぐ近所なので、毎日でも調査ができる」とのこと。これは、大学や博物館の研究者には真似できない芸当です。地の利を活かし、水質調査、藻類の分布調査や様々な実験が行われました。さらに、この調査には、上郡土木事務所、安室川自然再生委員会の皆さん、地元山野里なんでも探検隊の皆さん、そして当館の研究員(佐藤・三橋)

が参加し、学術的にも貴重なデータをとることができました。この成果は、当館の紀要最新号に掲載されています(上郡中学校科学部員による安室川の淡水産紅藻チスジノリを復活させる試み／人と自然 No.17 p.73-78,2007)。なかでもユニークなのは、川底の石をひっくり返したりブラシで磨く「川を耕す」活動です。上流にダムがあったり、泥がたくさん流入すると、川底の石の隙間が埋まります。実は、チスジノリはこういった隙間にホソボソと暮らしていたのです。また、水が汚れると石の表面に藻が異常に増えます。そうすると、藻に覆われて、暮らせなくなります。そこで、部員たちは川底をかき乱すことに取り組みました。一見すると、生物を減少させるような印象を持ちますが、川底が適度にかき回されるのが自然の姿です。実験的に石を磨いたところ、チスジノリの子ども(正確には胞子体)であるシャントランシア体がたくさん出現することが分かりました。部員たちによると、「寒い時期に川に入って石を磨くのはツライ」とのことでしたが、シャントランシア体を見つけてはなぜか「シャラボア発見」と騒ぎながら

辛い調査を乗り切ったそうです。川底を適度にかき混ぜれば、絶滅危惧種が増える。ちょっと常識とは違う発見、地道な水質調査や分布調査を継続したことが評価され、全国野生生物保護実績発表大会をはじめ、いくつかの賞を受賞。それに伴って、ラジオ出演や広報誌での紹介などにより、地域では一躍有名になったそうです。地域のこどもたちも赤いヒモを見ただけで「チスジノリみたいや」とか、川で調査していると、「ラジオ聞いたで、チスジノリの調査ごろうさん」とよく声をかけられると、東山先生は驚い

ている。誰も知らなかった珍しい藻、そして科学部の活動によって、川への関心が高まったのではないのでしょうか。おかげで、町民の多くが、「チスジノリ」や「シャントランシア体」を知っている日本マニアックな町になったとすれば、ぜひ町の花を「チスジノリ」にして欲しいところです。



チスジノリ



表彰された部員達

編集後記

ひとはくにも新年度がやってきて、新しいスタッフを迎えました。今回ど〜んと紹介した新しい職員、フロントスタッフ、ミュージアムティーチャーが、みなさんをお迎えしますので、是非、博物館へ会いにきてください。

また、エントランスホールには、ティラノサウルスやトリケラトプスなどもやって来て賑わいになりました。同じく、エントランスホールに5/1からミュージアムショップが“Open”しました。ショップから聞こえる心地よい音楽と漂うアロマの香りで、うっとり癒されます。博物館へ来館されたら是非エントランスホールへ！最後に、このリニューアルしたハーモニを発行するまで、本当にいろいろなことができました。発行にあたり、編集支援、取材協力してくださった方々に感謝いたします。

ひとはく新聞2007.6.12号

発行:兵庫県立人と自然の博物館

発行日:2007年6月12日

編集長:小林美樹

編集協力:生涯学習課・出版支援担当

印刷:(株)ブリテック

ミュージアムショップ
オープン!!

「ご来館の皆様に喜んで頂けるショップをめざし、笑顔と思い出を持ち帰っていただけて、なお、人と自然の博物館のさらなる活性化となるアクションを起こしていきたいと思っております。博物館イベントとタイアップしたディスプレイや、オリジナル商品の提案なんかができるといいですね。」

「お客様が手にとってご覧いただく瞬間に思わず笑顔がこぼれるような商品の選択にも力をいれていきたいとおもっております。」

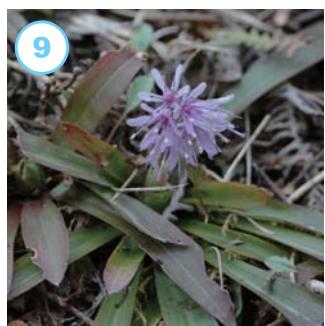
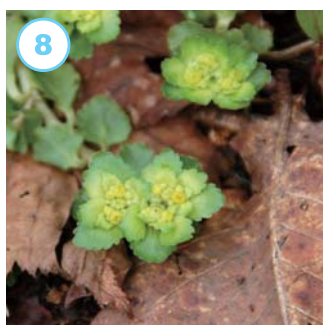
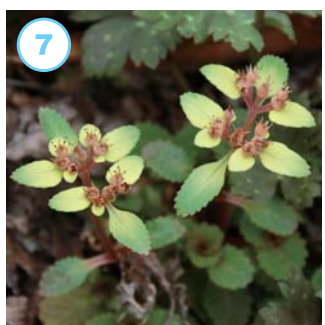
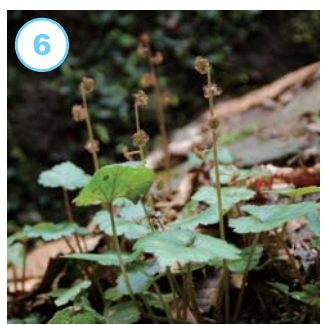
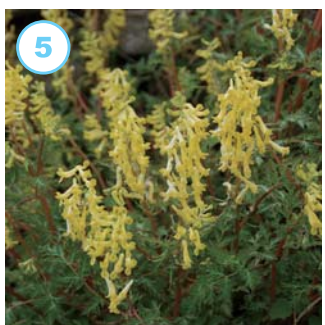
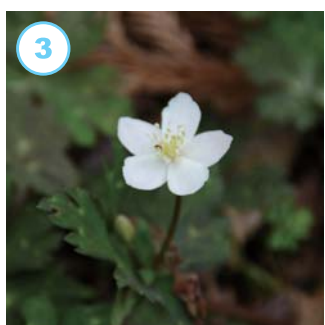
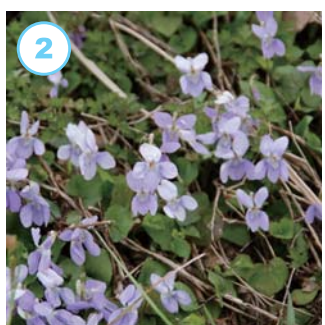
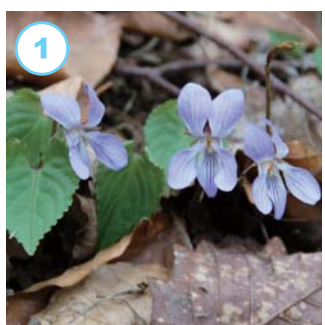
「商品を売るのではなく、楽しい思い出と笑顔を与えることを第一に考えずんでいけたら、素晴らしいことだと思います。」

とミュージアムショップ店長の藤原一也さん。みなさんも是非一度エントランスホールに新しく出来たミュージアムショップへ足を運んでみてください。

ハチ北高原の
早春植物図鑑

①スミレサイシン(スミレ科スミレ属):地下茎が太くて長い。花柄は高さ10-15cm、花弁は15-20mm。北海道及び本州の日本海側に分布し、山地の林下に見える。花は4-6月。葉は夏に向けてどんどん成長し、日本のスミレの中で一番大きくなる。 ②タチツボスミレ(スミレ科スミレ属):花期に根出葉があり、托葉は羽状に深裂する。花は淡紫色で、根生し、茎上にもつく。本州から琉球に分布。 ③ニリンソウ(キンボウゲ科イチリンソウ属):アネモネの仲間。茎葉が無柄で花が1-4個つくことが、イチリンソウとの区別点。白い部分は「がく」で5-6枚。花は4-5月。2-3cm。イチリンソウもニリンソウも、次のヤマエンゴサクとともに春植物(スプリング・エフェメラル)である。 ④ヤマエンゴサク(ケシ科キケマン属):地下に球形の塊茎があり、塊茎から一個の花茎がでる。花は青紫色で長さ15-25mm。高さは10-20cm。花は4-5月、本州から九州に分布。山中の樹林地に生える。 ⑤ミヤマキケマン(ケシ科キケマン属):ヤマエンゴサクと同じ属だが、キケマンの類は、エンゴサク類と違って地下に塊茎をもたないことで区別できる。ミヤマキケマンはつウロケマンの変種で、前者は果実が著しく数珠状になることにより、果実があまりくびれないつウロケマンから区別される。近畿以南の本州に分布。 ⑥コチャルメルソウ(ユキノシタ科チャルメルソウ属):花は総状につき、5数性。雄しべは5個でがく裂片と互生する。花弁は羽状に細裂する。高さは20-30cm。雄しべが花弁の基部から離れた花盤上につくことで、花弁の基部につくチャルメルソウ等近縁種から区別できる。本州から九州に分布。 ⑦ホクリクネコノメ(ユキノシタ科ネコノメソウ属):葉は対生。おしべは8個。根出葉は円形〜広楕円形でほぼ無柄。高さ10cm。花は5月。新潟から島根の日本海側に分布する。陰湿地に生える。 ⑧ネコノメソウ(ユキノシタ科ネコノメソウ属):葉は上の種と同じく対生だが、おしべが4個であることで区別できる。よく混同されるヤマネコノメソウとは葉が互生であることで区別できる。北海道・千島・本州に分布する。山ろくの湿地や谷間に生える。 ⑨ショウジョウバカマ(ユリ科ショウジョウバカマ属):花は淡いピンク色〜濃赤紫色。花期が終わると花茎がのびる。北海道から本州・四国まで分布。山野のやや湿った場所に生える。 ⑩チシマザサ(イネ科ササ属):稈は高さ1m以上になり、上部で分枝する。節はあまりふくらまず、主稈の葉鞘は枝の基部を包まない。ネマガリダケという別名の通り、地表近くの茎が曲がっている。開花は1回きりでその後は枯死する。北海道から鳥取県以北の本州日本海側に分布。 ⑪エンレイソウ(ユリ科エンレイソウ属):3枚の花びらに見える部分は「がく」由来の外花被片。花びらに相当する内花被片はない。果実は液果。北海道から九州まで分布。山地林のやや湿った場所に生える。 ⑫ミヤマカタバミ(カタバミ科カタバミ属):地上茎はなく、葉はすべて根生。地下には古い葉柄で覆われた太い根茎がある。花は白色で花茎の先に1個つく。近縁種にヒョウノセンカタバミがあるが、地下茎が細長くのび、古い葉柄が密集しないことで区別できる。花は3-4月。東部南部以南の本州、四国に分布。

(布施静香・高橋晃・高野温子:自然環境評価研究部)



植物リサーチクラブに参加してみませんか？

今回掲載した植物は、ひとはくセミナー「植物リサーチクラブ」の野外観察会で見られた植物たちです。4月28日から1泊2日でハチ北高原の豊かな自然を丁寧に観察し、標本作成や専門的な図鑑による同定など、さまざまな勉強をしました。今後、植物リサーチクラブでは、植物用語の勉強などいくつかのセミナーを予定しています。興味のある方は是非受講してください。

